

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	吉田 美奈
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授）浜崎隆司 副主査：（鳴門教育大学教授）田村隆宏 委 員：（鳴門教育大学教授）久我直人 委 員：（岡山大学教授）西山 修 委 員：（鳴門教育大学教授）皆川直凡
3. 論文題目	添い寝が子どもの心理的発達に及ぼす影響
4. 審査結果の要旨	<p>先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 吉田美奈 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査 日時： 平成30年2月24日（土）14時00分～14時50分 場所： 鳴門教育大学 人文棟5階 A512</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>序章</p> <p>第1章 研究の背景と目的 第1節 研究の背景 第2節 先行研究</p> <p>第2章 添い寝の実態調査 第1節 幼稚園児の添い寝の現状および保護者が抱く理想</p> <p>第3章 添い寝経験が子どもの心に与える影響 第1節 大学生が添い寝に対して抱くイメージと添い寝時の思い出 第2節 添い寝のしかたと就眠儀式の性差の関連 第3節 添い寝が愛着及び自尊感情に及ぼす影響 第4節 添い寝が信頼感・自立心・依存心に及ぼす影響</p>

第4章	添い寝が対人依存-非依存に及ぼす影響
第1節	対人依存-非依存尺度の作成の試み
第2節	添い寝と依存欲求および依存欲求容認の関連
第5章	総括
第1節	本研究のまとめ
第2節	望ましい添い寝のありかたへの提言
第3節	今後の課題

各章の概要は下記のとおりである。

第1章 添い寝に関する研究の背景と問題提起について言及した。添い寝とは、親子が一緒に床に就く就寝形態であり、乳幼児が家族と社会的・身体的接触のどちらか、または両方を緊密に行いながら多様な方法で寝ることを指す。日本の子育ては母子密着型であるといわれ、欧米に比べて子どもが自立すること以上に、家族との密接な関係を築くことや他者と支え合うことができるような関係を築ける能力を持つことの方が重視されており、添い寝はそのための重要な親子の関わり方として重視されている。本研究では、子どもの心理的発達に好ましい影響を与える添い寝の仕方とはどのようなものなのか、スムーズに一人寝に移れるタイミングとはいつなのか、添い寝をする親は普段からどのような態度で子育てに臨むべきなのかなどを検討するものである。

第2章 添い寝の実態調査では、90%以上の子どもが毎日のように添い寝をしており、添い寝が習慣化していることが明らかになった。親が理想とする添い寝の頻度についても併せて調査したところ、「毎日」と「ほぼ毎日」を合わせた割合は、実際に添い寝をしている頻度より20%程度低く、親がもう少し添い寝の頻度が低くてもよいと考えている様子がうかがえた。添い寝をする主な理由には、子どもとのコミュニケーション、夜中に子どもが体調を崩した時などに迅速に対応できるといった配慮、母親自身の添い寝経験の伝承、子どもの年齢、居住スペースの都合などが挙げられた。

第3章 大学生が添い寝に対して抱くイメージや思い出の分析では、添い寝が心身両面に影響を与える可能性や母親が父親やきょうだいの役割も果たしうるという可能性が示唆された。添い寝のしかたと子どもの就眠儀式の関連についての調査では、添い寝をしている人物や頻度により就眠儀式の内容に違いがみられた。分析の結果、子どもが安心して就眠するためには母親が添い寝に介在すること、または両親のうちのどちらかが朝まで自分のそばにいてくれると感じることが必要であると示唆された。さらに「絵本を読む」などの積極的就眠儀式の習慣化の必要性も感じられた。子どもにとっては、ただ横に親が寝ていたり、お気に入りのぬいぐるみがあったりすることで十分なのではなく、安心して眠りにつけるような環境や習慣がいかにつくられるかということが重要だと言える。

添い寝が親への愛着および自尊感情に及ぼす影響についての研究では、AVOIDANT尺度に添い寝の期間による影響が見られた。まだ自立の準備ができていない段階で一人寝を始めたこと、もしくは自立心が活発になる時期を越えて添い寝を続けたことにより、一人寝へと移行せざるを得なくなった状況を回答者が親に拒絶されたと感じ、得点を高めた可能性が考えられる。また、母親の隣で添い寝をしていた者のANBIVARENT得点が高かった。これらの結果は、「先回り育児」により過保護や過干渉になることを避け、子どもの気持ちや状態をよく見て求めに応じる応答性の必要性を示唆するものである。この研究では、4～5歳で訪れた自立の適切なタイミングを捉えて一人寝へと導くことの大切さが示された。

添い寝が子どもの信頼感・自立心・依存心に及ぼす影響についての研究では、自立心

と依存心に添い寝経験の効果が表れ、信頼感には添い寝の位置および添い寝の期間の効果が表れていた。添い寝経験が女性の自立心の形成に対してより顕著な影響を与える可能性が示唆された。同じく添い寝経験が依存心を高める可能性が示された。信頼感については、男性の場合、両親の間で添い寝をしていた場合及び母親の隣で添い寝をしていた場合に高かった。女性については、3歳までに一人寝を始めた場合、それが自発的に始められたのではなかったとするならば、親に拒絶されたという感覚をより強く抱くことになるため親への信頼感が十分に育たず、結果としてその後関わる一般他者に対する信頼感も十分に育たないという可能性が示された。男児についてはどの時期までの添い寝が適切かを導き出すことはできなかったが、女児については4歳ごろまでの添い寝が望ましいことが示された。

第4章 添い寝が子どもの信頼感・自立心・依存心に及ぼす影響についての研究では、添い寝経験が情緒的依存欲求や道具的依存欲求を高める可能性が示唆されたものの、親への依存性との間には顕著な関係が見られなかった。この結果を受け、依存心のどの側面が高まるのかについて調査を行った。添い寝経験により道具的依存欲求および情緒的依存欲求容認が高くなることが示されたが、この結果は、親に働きかけて何かをしてもらうという日々の相互行為の積み重ねによるものだけでなく、親の養育態度や家族等への接し方など、行動規範の学習による可能性も示唆された。

第5章 第2章～第4章の研究についてまとめており、その総括として添い寝から一人寝と導く場合の親子関係や環境のありかたについて提言し、今後の展望と課題についてまとめた。

2. 審査経過

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

夜間の添い寝が子どもの心理的発達に及ぼす影響を探ること、望ましい添い寝の仕方や添い寝から一人寝へと導くタイミングを模索すること、そして望ましい親の養育態度について検討することが研究の目的であるが、そのために、まず第2章では添い寝の都市部と地方部の地区において実態調査を行った。そして、第3章で子どもが添い寝に対して抱くイメージや思い出を明らかにし、添い寝の仕方と就眠儀式との関係を探った。また、夜間の添い寝が子どもの心理的発達に及ぼす影響を探るため、添い寝が子どもの愛着、自尊感情、信頼感、自立心及び依存心に及ぼす影響を明らかにした。特に第3章で添い寝が依存心を高める可能性が示唆されたことから、第4章では添い寝が高める依存心の側面について検討し、そこから得られた知見をもとに、望ましい親の養育態度についても考察を加えている。これらの成果は、家庭における夜間の望ましい添い寝のありかたについていくつかの提言としてまとめている。以上のことから、本論文は、研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

(2) 研究の独創性と発展性

本研究の特徴は、添い寝そのものだけでなく、発達理論、愛着理論および親の養育態度による子どもの心理に対する影響という視座からの検討を行っていることである。本研究の成果から、添い寝から一人寝へ導く適切なタイミングが存在すること、また子育て中の親の生の声を反映させながら子どもが安らかに就眠するための物的環境と人的環境を含めた就寝時の環境づくりについて具体的な提言をしているところにこの研究の独創性がある。

添い寝は今でも日本における子どもの主要な就寝形態であるが、本研究では発達理論および愛着理論から見た望ましい添い寝の在り方がある程度示されたといえる。このような本研究の成果は、添い寝時に子どもがより心地よさや安心感を得られるような親子の関わり方や環境づくりについて提言可能な内容であり、親子関係や子どもの心理的発達を基軸とした実践的研究が今後期待される。

(3) 教育実践への貢献について

本研究では、添い寝から一人寝への具体的移行期や子どもの心理発達の環境作りに関する具体的な資料が提出されており、保育実践として乳児院、保育所等の午睡時での保育者と乳幼児

のかかわり方,家庭教育として就眠時の親子のかかわり方において実践可能な資料を提供している。

3. 審査結果

以上により,本審査委員会は,吉田美奈の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し,全員一致で合格と判定した。